

修士論文(要旨)

2014年1月

ネットワーク社会における大学生のコミュニケーションの現状
—オンライン・コンテンツの利用形態と友人ネットワークおよび心理的影響との関連性—

指導 石川 利江 教授

心理学研究科
健康心理学専攻

210J4061

山本 健太郎

目次

はじめに	1
研究史	1
目的	1
方法	1
調査協力者	
調査機関	
場所	
手続き	
質問項目	
まとめ	2
引用文献	3

【はじめに】

現在、インターネットは日常生活や職場などにおいて広く用いられており、インターネットは生活していく上で必須のものとなっている。その利便性は年を追うごとに向上しており、今や誰もがインターネットを使用する時代である。インターネットは主に情報収集に用いられるほか、利用者同士の交流にも多く使われている。近年は携帯電話の技術が急速に発達しており、特にスマートフォンの普及は著しい。スマートフォンはPCと同様の機能を搭載しており、通話やメール機能のほか、インターネットに接続してPCと同じようにサイトを閲覧したりすることもできる。従来の携帯電話では、主にメールや電話が使用されていたが、スマートフォンが普及してからは、インターネットにアクセスして検索エンジンやソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)、インスタント・メッセージングであるLINEを利用することも多くなった。かつて「いつでも、どこでも、だれでもネットワークにつながる」を理想とする、インターネットの常時接続社会(ユビキタス社会)^{*1}が到来している。

【研究史】

インターネットを用いたコミュニケーションは、利用者に精神的に大きく影響を与えるものとして、社会心理学や社会学の分野など幅広い分野から数多くの研究が行われてきた。社会心理学における研究では、クラウトのインターネット・パラドクス²の概念が度々用いられ、現在でもなお賛否が分かれている。インターネット・パラドクスは、対面コミュニケーションに代わってインターネット・コミュニケーションに多くの時間を費やすことは、強く親密な対面の対人関係をもろく希薄なオンラインの対人関係に置き換えていくことにつながり、結果的に精神的健康が損なわれるというものである。Krautは、インターネットの使用時間に着目し、孤独感の増加や、抑うつ³の増加との関連性を報告した(Kraut et al.,1998)。これがインターネット・パラド

クスである。しかし、World Internet Project(2010)などによる後の研究では、インターネット利用時間のみではなく、利用形態や利用者の内面に着目するなど、さまざまな視点から考察することが必要であることを指摘している。また、利用者の内面に着目したものとして、Kimberly Youngのインターネット依存の先行研究が挙げられる(Young, 1998)。Youngは、DSM-IVの精神疾患の分類を元に、インターネット依存を診断する尺度の作成を行った。しかし、インターネット依存は、一貫した定義はなく、国際基準は存在しない。

【目的】

本研究では、現時点における若者のインターネット利用状況やインターネット依存度を把握し、インターネット・パラドクスの先行研究にのっとり、インターネット利用内容やネットワーク規模、心理尺度との関連性を検討する。

【方法】

調査協力者:大学生106名(男性37名,女性68名)。

調査期間:2013年6月末日(質問紙調査)

場所:調査協力者のプライバシーの保護できる場所で行った。

手続き:関東の4年制私立大学に在学する大学生に対して、調査に同意できる場合のみ回答してもらい、その場で回収した。

質問項目

①回答者の基本的属性、携帯の所持、インターネットの使用に関する質問、よく接続するオンライン・コンテンツ、ネットワーク規模をそれぞれ尋ねた。②今回の調査において作成したツール別利用尺度について尋ねた。③インターネット依存尺度20項目を5件法で尋ね、得点結果を「20~39点」「40~69点」「70~100点」の3段階で評定した。④相川⁴の特性シャイネス16項目を5件法で評定した。⑤EQ尺度16項目を5件法で尋ねた。

【結果・考察】

106名全体のうち、有効回答87名(男性31名, 女性56名:平均年齢=20.26, SD=0.80)を調査対象とした。得られた結果から、インターネット利用内容尺度を因子分析し、「SNS利用およびつながり因子」「LINE利用因子」「おしゃべり使用型因子」の3因子を抽出した。

相関分析を行った結果、インターネット依存度得点は、利用時間($r=.417, p<.001$)および、おしゃべり使用型因子($r=.350, p<.001$)に強い正の相関が見られた。インターネット依存度と、シャイネスおよびEQの心理尺度とは相関が見られなかった。また、インターネット利用時間に性差が見られ、男性の方がインターネット利用時間が長かった。これは、先行研究でも同様の調査結果が報告されており、それを支持する結果である。ネットワーク規模については、「LINE・メール条件」および「SNS条件」において「知り合い・その他」の交流相手がないと答えた人数が最も多かったことが特徴的であった。

【まとめ】

インターネット利用時間とインターネット依存度に有意な相関が表れたことは、Youngの主張を支持するものといえる。しかし、心理尺度においては、インターネット依存度とはあまり関係がなかったた

め、インターネット依存が必ずしも心理的な影響を受けているとは言い切れない。さらなる心理尺度による検討が必要である。今後は、インターネットを用いたコミュニケーションについて教育が必要であり、これまでにはなかったコミュニケーションの方法として出現したインターネットを、どう活用するかについて焦点を当てた検討が求められる。

※1「いつでも・どこでも・だれでもネットワークにつながる」という概念。この他にも様々な意味を持つとされるが、現在は上記の内容を指すとされる。

※2 社会学では、道具のコンサマトリー (consummatory) 的利用とインストゥルメンタル (instulmental) 的利用に分類することがある。前者は、非経済・享楽といった意を表し、後者は手段などを表す

参考サイト

World Internet Project. ワールドインターネットプロジェクト研究 財団法人国際コミュニケーション基金 . 2010

【引用文献】

Kraut R. Patterson M. Lundmark V. Kiesler S. Tridas M. and Scherlis W. "Internet Paradox: a social technology that reduces social involvement and psychological well-being?" ,American Psychologist, 53, p.1017-1031. 1998.

KrautR.et.al. "Internet Paradox Revisited" Journal of Social Issues vol.58 2002..

SandersField M. Diego M. and Kaplan M. "The relationship of internet use to depression and social isolation among adolescents" Adolescence, 35, p.237-242. 2000

Kimberly S Young. 『インターネット中毒—まじめな警告です』、毎日新聞社、1998

川浦康至・坂田正樹・松田光恵、「ソーシャルネットワーキング・サービスのりように関する調査—mixi ユーザの意識と行動—」、コミュニケーション科学、23号 p.91-110. 、2005年

太幡直也、「ソーシャル・ネットワーキング・サービス上での個人情報公開に関する心理学的研究—プライバシー意識に着目して—」、常磐大学人間科学部、2010年度若手研究助成最終報告書、2010年